

大気圏内

かて

遠くで何か燃えていた。怒れる人々の声と足音に溢れる高速道路で、人波に押されながらめちやくちや後悔していた。二時間か三時間前、俺は激怒したというのに。母の顔にあざが増えていたからでも、父親が借金を増やしてきたからでもない。逃げたのだ。父親が。

いつものようにテレビを見ていた俺は、いつものように区に現れた巨大な怪人を、いつものように巨大ヒーローが倒すのを見ていた。映画とかではなく、現実で。いつもと違かったのは、ヒーローが苦戦していたことだ。なんとか必殺のパンチで倒したものの、戦いを終えた彼の体はみるみる縮んでいった。そしてその場に、俺の父親が現れたのだ。呆気に取られている内にどこかへ飛び去ってしまった。俺たちに莫大な借金を残したまま。

世間では英雄をたたえる声が止まなかった。「ありがとう」「かっこいい！」そんな言葉を見るたびに虫唾が走った。勝利を記念したロケットまで作られる始末だ。ああまさか、Dと借金にまみれた人間を称賛するなんて。

戦いの後、倒されてしぼんだ怪人が収容された特別車両は、研究所に向かうはずだった。しかしある団体に足止めを食らい、高速道路上で横転している。他人事のように言ったが、俺も完全に参加者だ。以前から怪人の収

容に抗議する団体があったのだが、それが今回、あのDとヒーローが消えたことで勢いを増している。彼らの目的は怪人の解放で、俺もそのつもりで来た。飛び入り参加だ。絶対に親父をぶちのめしてやると決意したのだ。瓶やボール、怒号が飛び交う中、人の激流を抜けて車両に潜り込んだ。そこには暗く冷たい空間に縛られた、無機質な者がいた。

「おい怪人、ここから出してやるから俺を手伝え。」

「いいだろう。」

話が早くて助かった。機械のような印象があったので余計な交渉はしなかった。彼を縛っていた錠は驚くほどあっさり和外れた。と同時に怒れる人々が車両に流れ込んできた。

「逃げよう！」

——抗議団体と制圧部隊、そして彼らの争いに囲まれた車両を、とてつもなく大きな衝撃が貫いた。それと同時に黒い影が天へと登っていき、爽やかな夏の空を裂きながら町へと飛んで行った。それにしがみつく俺の事には、誰も気づかなかったようだ。

街の向こうで鳴るサイレンと警報を聞きながら、夕焼けの届かない空き地に座っていた。ラジオからは怪人、英雄、ロケットの話が繰り返し流れていた。

「あの男の居場所が分かるというのは本当か？」怪人

が言う。

「もちろん。どうしてかは分からないけど、昔からそうなんだ。でも今は言わない。」

「なぜだ？」

「いや、だって……」俺たちは親父を倒す計画を立てていた。

「お前一回負けてるよな？このまま行っても勝てないだろ。」

「気が付かなかった。その通りだ。」賢そうな雰囲気を持ちながら、そんな事は無かった。

「どうすれば勝てる？」

「特訓だ。」彼は親父と戦った際、出会いがしらに光線を吐き出した。親父も咄嗟に光線に対抗したが、そのせいで消耗したようだった。はつきり言って、そこが一番惜しかった。

「だから、お前には光線の特訓して強くなってもらおう。」

「了解した。」了解したように見えなかったが、信じることにした。俺はこいつを育てて、親父をやっつけさせる。

夜が来た。俺たちは河原に来ていた。川面はぼんやりと月を隠す曇り空を映し、いつも通り穏やかだった。

「ここで光線を吐けばいいのか？」

「いやまだだ。まずこれを使って特訓してもらおう。」もったいぶって取り出す。

「大きめのペットボトル？」怪人がこちらを見る。こ

れをどう使えばいい、の顔だ。

「確認だけど、光線打つのに肺使ってるよな？」ああ。と怪人がうなずく。

「よし、じゃあそれ啞えて息吸ったり吐いたりするんだ。肺活量の特訓だ。」

「はつきり言うが、これは吹奏楽部の特訓だ。光線の特訓には適さない。」宇宙にも吹奏楽部があるのか。と驚く。

「いいからやれよ。」「了解した。」特訓が始まった。

生ぬるい風が吹いて、微妙に伸びた草が足に触れた。一時間くらいたっただろうか。特訓の間、俺は本を読んでいた。怪人はひたむきに取り組んでいた。

俺は起き上がって静寂を破った。「ここで一回光線出してみなよ。」

「よし。」大きく息を吸う。青白く光りだした体が眩しい。勢いよく突き出した口から轟音が響き、光線が夜の闇を貫いた。少しの沈黙の後、「出力が上がっている！」と怪人。

「すごい……やっぱ肺活量なんだ！」そんな興奮を河原に残して、二人して全速力で逃げ帰った。捜索隊が光に群がってきそうだったからだ。

その後も夜になったら適当な場所へ赴き、相変わらずロケットの開発状況を繰り返すラジオを聞き流しながら

特訓を続けた。それからお互いの事を話した。親父が宇宙犯罪者である事や、怪人は逮捕のために来訪したという事をさらっと聞いて驚いたが、一方で親父への反抗が間違っていないかったという安心もあった。

「ずっと一人で仕事してんの？」と聞いてみたことがある。

「宇宙での孤独は必然だ。」淡々と話す姿を覚えている。

多分二週間くらい経った。テレビでは女子アナウンサーが騒いでいる。後ろにはロケットが小さく映る。「今日はついにロケットの——」ああ、知ってる。打ち上げの日だ。なんと精鋭の科学者たちは二週間でロケットを作り上げたらしい。元々あったものを少しいじったらいいが、それでも早い。ロケットにはカラフルな花火が搭載されていて、大気圏突破後に大爆発を起こすらしい。このド派手な花火が奴に贈られるとのことだ。

「この技術を他に使えないのか。」隣で見ていた怪人が呟いた。その通りだと思いつながら、群衆のカウントダウンを見ていた。

この世界を救ったヒーローへの愚かな祝福は、立派という他ない美しい軌道で空へ突き抜けていった。

ぼんやりとしながら、画面を見ていた。親父の動向を思い出す。奴はあの場から飛び立った後、どこに向かうでもなくただ上昇していき、大気圏の外まで行って停止

した。その後には動きは見られなかった。実は停止後に、俺は奴の居場所だけでなくうつつすらと感情も感じ取れることに気が付いていた。そしてここ二週間、なんとなくニヤついた気配を感じていた。おそらく自分への称賛でも見ながら、見返りでも待っているのだろう。気が付くとそんな旨の事を怪人に話していた。思わず。

「癪だ。ロケットに乗れば直接殴りに行けたかもしれない。……ロケットの位置と親父の座標が近づいていく。気のせい……じゃない。確かに感じる。打ち上げ場所の真上にいたのか？ロケットが大気圏を抜けた。それと同時に、微かな焦りを覚えた。恐怖も……これは俺の気持ちじゃない。なら誰の……答えに気づき始めると同時に、俺自身は清々しいほどの愉悦を感じていた。この焦りと恐怖が、誰のものか知っていたからだ。

窓から顔を出して見上げると、赤や黄の花火が小さく空に弾けた。それと同時に、焦りも恐怖も一切感じられなくなった。

河原に来ていた。いつもと同じ、穏やかな夜だ。名も知らぬ虫が鳴いているのが聞こえた。世間は英雄の死など知らず、相変わらずの日々を過ごしていた。あの後、怪人はさっさとどこかへ行ってしまった。別れを惜しむ暇もなかったが、宇宙ではそれが常識なのだろうと自己

解決した。

それでも少し悲しかった。

特訓は無駄だったし、世間は称賛を続ける。……密かに可能性を信じていた、怪人との暮らしもなかった。きっと、思い通りになる事の方が少ないのだ。唯一借金の取り立てはある時急に無くなったが、それでもやるせないことばかりで嫌になる。

だからここに来た。ポケットからライターを取り出し、しゃがみこんだ。母はこのライターを快く貸してくれた。

切ったペットボトルの口にロケット花火を挿し、ライターでゆっくりと火を着けた。怪人への感謝、寂しさ、世間への軽蔑が心に詰まっていた俺には、それを吹き飛ばすための何かが必要だった。彼がもう宇宙へと帰ったかまだこの星にいるかは分からなかったが、ほんの少しでも感謝を伝えたかった。少し離れて、潰されたネズミのような声を出して昇っていく火花を見つめていた。

バンという音が夜の静けさを弾き、その火花は誰の身を焼くでもなく、再び穏やかな闇に消えていった